

時代に対応する原風景の有効的利用 ―アメニティの創造―

はじめに

近年、アメニティという言葉が都市計画の分野において一般的に使われる。大辞林（三省堂）での定義は、「都市計画がめざす居住環境の快適性。数量的に捉えにくい歴史的環境や自然景観などにも配慮した総合的な住み心地の良さ。」とされているが、個人的には「あるべきものが、あるべきところに健全な状態である。」と捕らえればよいと解釈している。

では、「あるべきものが、あるべきところに健全な状態である。」ということ、活気あるまちづくりにつなげるための方法論とはどのようなものだろうか。ここでは健全な状態という点が重要であり、このフレーズを満たすため2つのポイントが挙げられる。

ひとつは、必要性を持っているということ。特徴を出そうとするあまり過度な存在表現をしすぎるにより、その必要性事態に疑問をいだいてしまうという失敗は多く、景観論についての著書などではたびたび取り上げられている（例えば、篠原修・鉄鋼技研研究会編「橋のデザインを考える」）。

もうひとつは、時代に適応しているということ。例えば、動物園や遊園地などのテーマパークを例に考えてみたい。現在、動物園や遊園地の閉鎖が全国的に相次いでいる。動物園には動物がいて、遊園地には観覧車やジェットコースターといった乗り物が準備されている。こうした状況はこのような施設が各地で盛り上がりを見せたころから普遍的な点であり、ある意味「あるべきものが、あるべきところにある。」といえる。しかし、こうした施設の多くが実際には衰退している。これは、社会情勢の変化に対応せず、普遍的な状況を貫いた結果であるように思う。

つまり、健全な状態とは「あるべきものが、あるべきところにある。」ということ、前提にしつつも、決して普遍的なものと同義ではなく、時には時代変化に柔軟に適応することも必要であると考えられる。



写真-1 紫川（北九州市）にかかる橋



写真-2 民事再生法が適用されたスペースワールド

写真-1：篠原修・鉄鋼技研研究会編「橋のデザインを考える」より

写真-2：スペースワールド公式HPより

福岡県の特性

福岡県は九州では唯一福岡市と北九州市という 100 万都市を抱える県である。

また、自然にも恵まれており、県内には米や野菜、果物の特産地を多く抱えている他、水産業では、玄界灘や博多湾で多種多様な魚介類を生産し、水産加工業も盛んに行われている。なお、博多漁港の水産物取扱金額は全国一となっている。また、かつて鉄のまちとして知られた北九州市（八幡、戸畑）や炭鉱のまちとして知られた田川や大牟田など、特徴的な地域が多く見られる。

このように、福岡県内にはそれぞれに特徴を有した地域が存在し、そこには長い歴史の中で作られてきた風景や特徴がある。これらの資源をより時代に即した形で生かし、その地区にあったアメニティを形成することが必要と思われる。



写真-3 福岡市の中心市街地



写真-4 炭鉱の町田川のイメージ写真



写真-5 八女の茶畑



写真-6 志摩町の桜井二見ヶ浦

写真-3：福岡市 HP より天神地区の様子

写真-4：田川市 HP より炭鉱節をイメージさせる月とトンネルのイラスト

写真-5：八女市公式 HP より

写真-6：志摩町公式 HP より「日本の渚 100 選」にも選ばれた桜井二見ヶ浦

活性化が求められるエリアの選定

前述したように福岡県内には多くの特徴的な地区が多く見られる。

しかし、都市として経済や産業の面で中心を担う福岡市や、例にあげた志摩町や八女市のような海や山など自然豊かな市区町村などは、現在その土地が持つ景観資源や観光資源を更に伸ばしていくことで発展が可能であり、大幅な方向転換を必要としないのに対し、かつて工業で栄えた北九州市や大牟田市、あるいは炭鉱の町として栄えた田川などの筑豊地区などは、かつて栄えたそのままのスタイルを維持すること自体が難しくなっているのは誰もが理解されるところではないだろうか。第2次産業が衰退した現在、かつて工業によって栄えたまちが今後従来どおりのスタイルを貫くことは、先に述べた動物園や遊園地などのテーマパークと同様の道をたどることが予想される。

ここでは、これらの地域を対象に時代変化に対応したアメニティの創造を提案したい。

具体的提案

北九州市に対象を絞って話を進めるが、北九州市では八幡製鉄所の閉鎖などもあったものの、小倉北区、戸畑区、八幡東区などいたるところに今でも工場地帯が存在する。しかし、そこにはかつて人々が北九州市に抱いていたような黒くにごった低い空や、悪臭をはなつ川が流れているわけではない。

私は、現在の若い人々にとって、特にそこに住む人々にとっては、巨大な煙突がそびえ機械的な建物が並ぶ工業地帯は視覚的には“かつこいい”ものであり、他の地域に誇れる景観資源ではないかと考えている。事実、これと同様の意見を持った友人や知人を私は何人か知っている。ここにヒントを得て以下の計画を提案したい。

「工業地の外観を有効に利用した再開発地区計画」

ここでの再開発とは、工業地帯のように、若い人たちがその地域に昔から実際に存在するために無意識のうちに潜在意識に刷り込まれた“かつこいい”と思う場所（原風景）の中に実際に“かつこいい”ことができる場所を作るという発想によるものである。工業地帯は夜間作業のため照明の明かりが通路を照らし夜の景観も独特なものがある。こうした独特の雰囲気を残す空間にバーやビリーヤード、クラブなど、若い人々が集まれる場所が作れば、都市が長年にわたって築き上げてきた雰囲気やイメージを壊すことなく、新しい意味でのアメニティ空間ができるのではないだろうか。

工場の閉鎖などがある中で、北九州市に限らず、福岡にはこうした原風景を有効に利用し、そこに付加価値を加えることができる地区が多数存在する。こうした発想を適用できれば、観光等の面からも有効なまちづくりが展開できるのではないだろうか。